

8月の技術対策（水稻）

平成19年8月1日
ＪＡきたそらち・ＪＡ北いぶき
空知農業改良普及センター北空知支所

1 登熟向上のための水管理

開花・受精後、米粒は急速に成長するため、かなりの水分を必要とします。出穂後の土壌水分を適正に確保して、粒の肥大と登熟の良化に努めましょう。また、少雨傾向によりかんがい水が不足気味です。地域で話し合い、水を有効に利用できるよう調整して使いましょう。

表1 米粒の外観的生長

項目	最大に達する 受精後の日数
長さ	5～7日
幅	15～16日
厚さ	20～25日

(1) 出穂期間の水管理

- かんがい水が十分供給される場合

出穂が始まったら入水して浅水とし、水位が下がって田面が見えてきたらヒビ割れが入る前に入水しましょう。

- かんがい水が不足している場合

冷害危険期終了後の中干しは実施せず、通水されている日に差し水をしながら2～3cmの水深(極浅水)を保つ。

(2) 登熟期間の水管理

ア 登熟期間の土壌水分を適正に確保しましょう。近年、収穫時のコンバインの走行性を重視するあまり、落水時期を早めた結果、土壌水分が不足し米粒の生長が阻害され登熟歩合が低下している例が少なからず見られます。

- かんがい水が十分供給される場合

- ・排水良好田(褐色低地土など)では

穂かがみ期頃(出穂期後25日頃)を目安に落水します。また、用水路の断水前に一度5～10cm程度湛水し、落水後の土壌水分を適正に保ちましょう。

- ・排水不良田(グライ土・泥炭土など)では

出穂期～出穂揃に落水しますが、1cm以上のひび割れが生じないように、走り水を実施します。

- かんがい水が不足している場合

- ・排水良好田は、穂かがみ期頃まで出穂期間からの極浅水を継続し、田面が見えてきたらひび割れが生じる前に、通水されている日に入水する(ヒビ割れが生じてからの入水では大量の水を必要とするため)。

- ・排水不良田は通常の落水時期、水管理とする。

- ・8月上旬に乗用管理機(水田ビークル)での防除を予定している水田についても、防除終了までは浅水を継続して下さい。

イ 登熟前半に高温と土壌水分の不足が続くと乳白・腹白・心白粒の発生が懸念されます。出穂後20日以内に、日中の気温が29℃以上で夜間も23℃以上になる日が5日以上続くと予想される場合は、3cm程度の水深を保ちましょう。

ウ 落水後は、田面に靴底の跡が約1cmつく程度の土壌水分確保に努めます。

(表土1cm下の土を握って指の間から水がにじみ出る程度)

乾燥状況に応じて走り水を実施し、大きな亀裂が生じないようにして下さい。

かんがい水の確保量、通水制限等の状況は土地改良区によって異なります。詳しくは、土地改良区の情報に基づいて水管理を行って下さい。

表2 登熟期間の土壌水分状態が収量と品質に及ぼす影響

土 壌 観 察	収量への影響	品質への影響
作土に深い大亀裂が生成、水稻根の切断が観察	×	×
作土に幅 1cm くらいの亀裂多数、足跡がつかない	▲	×
表面に小亀裂が生成、わずかに足跡がつく	○	○
表面のみ乾燥、亀裂微、明瞭に足跡が残る	-	-

注) ○：好適、▲：境界領域、×：不適 (平成13年 上川農試 改表)

表3 干ばつ水田の収量

亀裂の状況	収 量 kg/10a	屑米重 kg/10a
亀裂 2cm 以上	377	126
亀 裂 少	428	74

(平成9年 空知南東部普及センター)

表4 落水時期と品質

落水期 月日	収量 kg/10a	屑米 kg/10a	検査 等級	落 等 要 因
8.20	485	89	1	-
8.13	476	90	2	形質充実度

(平成9年 空知中央普及センター)

2 病虫害防除

【いもち病】

出穂期頃の基幹防除後も安心してなく、「昨年発生した水田」や「例年発生しやすい水田」を中心に観察を続けましょう。もし、葉いもちの増加や穂いもちの発生がみられた場合は追加防除を検討して下さい。北海道病虫害防除所が出している発生予測システム(BLASTAM)も参考にして下さい。(感染好適日の5～7日後に観察すると効率的)

病虫害防除所ホームページ <http://www.agri.pref.hokkaido.jp/boujoshou/index.html>

【カメムシの補完防除】

カメムシの2回の基幹防除終了後の3回目以降の防除要否は捕虫網による水田内のすくい取り結果によって判断して下さい。

要防除水準は、20回振りで平均2頭以上確認された場合(ほしのゆめは1頭以上、ななつぼしは暫定的に1.5頭以上)ですが、低温年・高温年は出穂の遅速や加害期間の平均気温を下表に当てはめて、要防除水準を補正して下さい。

表5 出穂遅速、加害期間平均気温に応じた要防除水準(頭数)

品 種	出穂の遅速の平年比				気温(加害期間平均)の平年比				
	10日早	5日早	平年並	5日遅	+3	+2	+1	±0	-1
きらら397	1.0	1.4	2.0	2.8	0.6	1.0	1.4	2.0	2.6
ほしのゆめ	0.5	0.7	1.0	1.4	0.3	0.5	0.7	1.0	1.3
ななつぼし	0.8	1.1	1.5	2.1	0.5	0.8	1.1	1.5	2.0

地域や集団で使用農薬が決まっている場合は、定められた薬剤を使用して下さい。

3 薬剤のドリフト防止に努める

農薬散布時の周辺作物へのドリフトを避けるため、散布時の風速や風向、防除機の手操作には十分に注意して下さい。また、近隣の生産者とも連絡を取り合い、トラブルのないよう防除を実施しましょう。

詳細は「7月の技術対策(水稻)」を参照して下さい。

4 明年に向けた育苗床の準備

本年、苗の生育が不良だった箇所、新規の育苗床、緑肥エン麦が黄化している場合(低pHの恐れあり)等は、必ず土壌診断を受けて下さい。pH調整が必要な場合は、今月中に実施して下さい。